

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 尾崎 萌子

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授

文学研究科委員

井上 逸兵

副査 共立女子大学国際学部教授

阿部 圭子

副査 大阪大学人文学研究科教授

Matthew Burdelski

論文題目 : Cultivating Empathy: A Cross-Cultural Analysis of Language Socialization Through Picture Book Reading Practices

(共感の社会的生成：絵本の読み聞かせを通じた言語社会化の対照分析)

本論文は、社会言語学、言語人類学の一分野としての言語社会化の枠組みにおいて、日本とアメリカにおける絵本の読み聞かせを通じた言語社会化のプロセスを、特に共感の獲得に焦点を当てて分析したものである。本研究は、感情が社会的構築物であり、親などの身近な他者との相互作用を通じて発達するという前提に立ち、その文化的背景の諸相を論じている。特に、社会的感情の一つと考えられる「共感」の獲得過程における言語的相互作用の役割について、日本とアメリカの親子を対象としたサンプルを用いて比較分析を行い、この分野における新たな知見を提供している。

<論文概要>

本論文の構成は以下の通りである。

Chapter 1. Introduction

1.1. Background

1.2. Objective and Scope of This Study

1.3. Organization of This Dissertation

Chapter 2. Theoretical Framework

2.1. Language Socialization

2.2. Emotions, Empathy and Emotion Socialization

2.3. The Zone of Proximal Development and Scaffolding

2.4. Summary

Chapter 3. Literature Review

3.1. Language Socialization in Japan and the USA

3.2. The Role of Picture Books in Linguistic and Emotional Development

3.3. Shared Picture Book Reading in Japan and the United States

3.4. Summary and Research Gaps

Chapter 4. Scaffolding Emotional Readiness

4.1. Introduction

4.2. The Literature on Enactment During Shared Book Reading

4.3. Methodology

4.4. Results

4.5. Discussion

4.6. Summary

Chapter 5. Scaffolding Empathy and Perspective-Taking

5.1. Introduction

5.2. Methodology

5.3. Results

5.4. Discussion

5.5. Summary

Chapter 6. Discussion

6.1. Synthesis of Findings from the Previous Chapters

6.2. Emergence of a Two-Tier Scaffolding Approach

6.3. Reconceptualization of the Zone of Proximal Development

6.4. Implications for Emotion Socialization

Chapter 7. Conclusion

7.1. Concluding Remarks

7.2. Limitations and Directions for Future Research

第1章では、本研究の背景と目的を論じ、感情社会化研究における本研究の位置づけを明確にしている。従来の研究では、言語社会化における文化的差異や、親の育児スタイルが子どもの言語発達に及ぼす影響が議論されてきたが、共感の社会化に関する比較研究は十分に行われていないことを指摘した。本研究は、日本とアメリカの親の言語的相互作用による共感性の発達支援に焦点を当て、様々ないわゆる文化的要因が親の養育行動にどのように反映されるかを明らかにすることを目的としている。特に、日本とアメリカの親が示す共感性レベルの差異の検証、および、両文化の親が子どもに共感性を培うために採用する方略の分析を主要な研究課題として設定し、これを実証的に検討する方略を講じた。

第2章では、本研究の理論的枠組みを構築するために、言語社会化、感情と共感の社会化、発達の最近接領域（ZPD）とスキャフォールディングの概念を詳述している。言語社会化理論（Ochs & Schieffelin, 1986）は、言語の習得が単なる知識の蓄積ではなく、文化的価値観や社会的規範の内面化を伴うプロセスであることを示し、また、感情と共感の社会化に関する研究（Eisenberg, 2002; Decety & Jackson, 2004）では、子どもがどのようにして他者の感情を理解し、共感を示す能力を発達させるかが論じられている。さらに、この分野では伝統的な Vygotsky (1978) の ZPD 理論と Wood, Bruner, & Ross (1976) によるスキャフォールディングの概念を再評価しつつ取り入れ、親の発話がどのようにして子どもの共感的理解を支援するかを考察する枠組みを論じている。本研究は、これらの概念を統合することで、共感の獲得過程を分析する新たな視座を提供すると主張する。

第3章では、日米における言語社会化や絵本の読み聞かせに関する先行研究を整理し、研究上の課題を明確にしている。特に、従来の研究における方法論的限界の指摘と、それを克服するための新たなアプローチの必要性を論じている。これまでの研究では、質的研究に偏る傾向があり、定量的な比較研究が不足していた。また、共感の社会化を扱った研究は存在するものの、言語的手がかり（cues）としてどのようにそれらが表現されるかについての分析は限られていた。本研究では、これらの課題を克服するために、MAXQDA などを用いた言語データの体系的コーディングと統計分析

を組み合わせた混合的研究手法を採用して、日米の親の発話パターンの違いを精緻に分析するとした。

第4章では、第1の実証研究として、0歳2ヶ月から4歳11ヶ月の子どもを持つ日米の親子（アメリカ人165組、日本人105組）を対象に、『はらぺこあおむし（*The Very Hungry Caterpillar*）』の読み聞かせ分析を行っている。この実証研究では、MAXQDAを用いた混合調査法（質的・量的分析の統合）を採用し、親の発話のタイプを詳細に分析した。結果として、日本の親は物語のキャラクターになりきる「なりきり発話（enactments）」を多用し、キャラクターの感情を再現しながら読み聞かせを行う傾向が見られ、一方、アメリカの親は「感想を求める質問（opinion-asking）」を頻繁に行い、子どもが物語に対して主体的に考え、自らの意見を述べる機会を提供することが特徴的であることをデータ主導的に浮き彫りにした。このことは、この両文化において、異なった共感の促進方法をとることを示唆するものであるとした。

第5章では、第2の実証研究として、3歳から7歳の子どもを持つ親（日本人112名、アメリカ人59名）を対象に、文字のない絵本_Found._を用いた分析を行っている。この研究では、親の単独朗読と子どもへの読み聞かせを比較することで、感情表現におけるいわゆる文化的差異をより精緻に検討した。分析の結果、日本の親は、ここでも登場人物の感情を表現する「なりきり発話」を用いた共感の促進を行う傾向が強かった。一方、アメリカの親はキャラクターの感情を説明し、子どもに解釈を求める質問を投げかけることが多いことが示された。この研究を通じて、文化ごとに異なるスキャフォールディング戦略が、親の発話スタイルに反映されていることを論じた。

第6章では、これらの実証研究の結果を統合し、新しい概念として「二層の足場掛け（Two-Tier Scaffolding）」を提案している。従来の「実践的足場掛け（Practical Scaffolding）」に加えて、親が子どもの将来的な発達を見据えて準備的に行う「事前的足場掛け（Readiness Scaffolding）」という概念を導入し、ZPDの再概念化を試みた。さらに、共感の発達プロセスを包括的に説明するためのARCモデル（Assisted Comprehension, Reflective Application, and Creative Engagement）を提案し、以下の3つの発達段階を定義した。すなわち、

1. ZAC（Zone of Assisted Comprehension） - 支援を受けながら理解を深める段階
2. ZRA（Zone of Reflective Application） - 経験に基づき考察する段階
3. ZIA（Zone of Innovative Application） - 独自の解釈や応用を行う段階

である。これにより、単なるタスクの遂行能力ではなく、共感の発達過程を理論的に

説明できる新たな枠組みを提供している。

第7章では、本研究の限界と今後の課題を論じている。本研究は、日米の親の共感的養育スタイルの違いを詳細に明らかにしたが、調査対象の拡大（例：他の文化圏を含めた比較）、言語以外の要素（身振り・表情・声のトーンなど）を考慮したマルチモーダル分析、共感の発達を長期的に追跡する縦断的研究などを今後の課題として挙げている。

<審査要旨>

本博士号請求論文は、主として以下の点において評価できる。

本研究が示した新たな概念やモデルは、今後の言語社会化・感情社会化研究において発展的な議論を促すものであり、特に文化的諸要因が親の発話スタイルに与える影響を多角的に捉えた優れた論考と言える。

本研究の方法論的な独自性は、従来十分な研究が行われてこなかった領域において、研究の困難さを指摘しつつ、それらを克服するための分析手法を提示した点にある。前段階として、子どもの日常会話の動画収集は一般に困難とされ、一定数以上のデータを入手すること自体が容易ではない。特に日本では、親が子どもの映像データを提供することに慎重である傾向があり、家庭内での親子のやりとりを長期的に記録し、比較研究を行うことには高いハードルがある。本研究では、絵本の読み聞かせという構造化されたデータの収集方法を用いることで、自然なやりとりを記録しつつ、日米の親の発話パターンを比較可能な形で分析する枠組みを確立した。

また、両言語・文化の深い理解が必要であることも、これまでの研究が限定的であった要因の一つである。共感の社会化は、単なる言語習得の問題ではなく、文化的背景や社会的規範と密接に結びついているため、言語間の比較には単なる翻訳以上の精緻な分析が求められる。本研究では、日英両方の言語環境を十分に勘案し、言語的・文化的ニュアンスを妥当なレベルで解釈し、誤った一般化を避ける創意を施している。これにより、単なる日米比較にとどまらず、文化的要因が発話パターンにどのように影響を及ぼすのかをより深く掘り下げることが可能となった。

感情に関する言語学的研究は歴史が浅く、本研究はこれまでこの領域が十分に研究されてこなかったがゆえの新規性もある。古典的なローマン・ヤコブソン（Jakobson, 1961）による言語の感情的機能の指摘に始まる、感情表現の言語的側面に関する研究は徐々には蓄積されてはきたが、方法論的な困難もあって、いまだ十分とは言えない。特に言語社会化と感情社会化を統合する研究はいまだ発展途上であり、体系的な枠組みが確立されているとは言い難い。本研究では、この研究ギャップに対応するために、

「二層の足場掛け」と「ARC モデル」を新たに提案し、従来の ZPD とスキャフォールディング理論を拡張する重要な理論的貢献を行った。

このように、本研究は、従来の研究が直面していた实际的、方法論的課題を克服し、日米の親子の発話パターンを実証的に比較する枠組みを確立しただけでなく、新たな理論モデルを提案することで、言語社会化・感情社会化の研究に新たな視点をもたらした点が評価される。

本研究は、方法論の革新性という点でも高く評価できる。従来の言語社会化研究では質的研究が主流であったが、本研究では定量的分析を積極的に導入し、MAXQDA を用いた混合的な分析手法を採用することで、より客観的な知見を得ることを可能にした。また、200 組以上の親子から収集された、この分野では大規模と言える量の読み聞かせデータを用いることで、質的データの深さと量的データの可視性の両面を考慮した研究デザインを実現している。このアプローチにより、個別事例の詳細な分析と統計的傾向の把握を統合し、単なる日米の類型化ではなく、サンプリングに基づいた発話パターンの比較を可能にした点が本研究の大きな強みである。

本研究の理論的貢献としては、上述のように「二層の足場掛け」の概念の提案と、ARC モデルの開発にあるが、これらは、従来の ZPD とスキャフォールディング理論を拡張する重要な枠組みであり、特に「実践的足場掛け」と「事前的足場掛け」の区別は、言語社会化研究に新たな視点をもたらすものである。「なりきり発話」は、実践的足場掛けの一例であり、子どもがキャラクターの立場になって感情を体験する機会を提供する。一方、アメリカの親がよく用いる「予測的な質問 (predictive questioning)」、たとえば「このキャラクターは次にどう感じると思う？」といった問いかけは、事前的足場掛けの一例であり、子どもが将来的に感情を言語化する力を養うための準備的な支援となる。上記の理論的意義がより明確になるのは、これらの発話カテゴリーコーディングを綿密に行うことによって、定量分析と定性分析の混合が相互に符合する形で、この言語社会化のプロセスの型を浮き彫りにすることに成功しているからであると思われる。

本研究のさらなる貢献は、日米の発話スタイルの比較を通じて、単なる「個人主義 vs. 集団主義」という二項対立では説明しきれない、より複雑な文化的要因が親の発話に与える影響を明らかにした点である。たとえば「なりきり発話」を多用する日本の親と「質問型アプローチ」を重視するアメリカの親という対照的な相互作用のパターンとその背景にある発話の諸相は、個人／集団といういわば手垢にまみれた類型を可視化できる形で乗り越えて、あらたな複層的な視点をもたらして論じた本論の意義は大きいと考えられる。これらの議論は感情社会化研究において重要な知見を提供して

いるだけでなく、より一般的にも有用な知見につながるものであろう。また、サンプリングを通じた言語的相互行為の実証的な比較分析により、これらの事象が日本語と英語の言語構造や社会的相互作用の規範とも深く関わっている可能性を論ずることができている。

その一方で、いくつかの課題も指摘できる。まず、子どものエージェンシー (agency) に関する分析が十分とは言えず、子ども側がどのように発話を主導しているのか、ターン・テイキングの親子いずれからかの主導性の詳細な分析が求められる。また、本論の課題でも触れられているが、非言語的な要素の分析も十分とは言えず、今後は動画データを活用したより多層的なマルチモーダル分析が求められよう。理論的にも、「二層の足場掛け」の概念提案と ARC モデルの開発については、言語社会化の枠組みにおける位置づけについてはより踏み込んだ議論があってもよいと思われる。それがより十全であれば、この分野への理論的な貢献度がさらに高まると考えられる。また、エスニシティやジェンダーの視点を取り込めば、より多層的な議論が可能になったであろう。特に日本語のトランスクリプトからは、ジェンダー的要素の表れと考えられる文化的情報が多く見られるので、そこにも論考が及べばより研究の深みをますことになったであろう。さらに、収入・社会階層などで読み聞かせ方が変わるのかなど、全体的に人口動態 (demographics) との関連性に関する議論が十分とは言えず、例えば、アメリカの AAVE 話者はより直接的なスピーチスタイルを多く用いる傾向があるなどの可能性があるかもしれない。また、一般に、言語社会化研究では、エスノグラフィックな手法を好む傾向があり、定量的な手法を用いないことが多く、その意味でも本研究は意欲的な挑戦といえることができるが、そのあたりの理論的正当化にももう少し議論をさいてもよかったと思われる。

以上のような課題を残してはいるものの、方法論的にも、理論的にも、得られた知見としても新規性があり、全体としてこの分野への貢献度の高い意義のある研究となっている。総合的に判断し、査読者一同は、本論文が博士号を授与するに十分値するものと判断する。